

国 語

2024年度 一般選抜試験(前期)

医療衛生学部

【注 意 事 項】

1. 国語の問題は51ページから75ページまであります。
2. 解答用紙(マークシート)の氏名・受験番号欄に記入・マークすること。
3. 選択科目欄に選択する科目を記入・マークすること。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の解答欄にマークすること。
5. マークする際は濃くはっきりとマークすること。その際、ボールペン・サインペン・万年筆等を使用しないこと。その他マークの仕方に関しては、解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。

I 次の文章は、筆者が「自己決定主義者」の考えを批判的に論じたものである。これを読んで、後の問1～問10に答えなさい。

自己決定の主張とは、「迷惑をかけない限り、何をしてもよい」という主張だとされる。だが、これは、自らが主張していること自身において、未決の問題を残してしまっており、完結しない、自存することのできない主張である。

つまり、「迷惑をかけない限りにおいて」と言うのだが、その「迷惑」とは何か。「他人に危害を加えない限り」と言うのだが、その「危害」とは何か。例えば、ある人がある行ないをするのを、あるいはある装いをするのを別の人が見て、その人がむっとするのはどうだろうか。私の美意識を逆なでするのはどうだろうか。このようにありとあらゆることが迷惑なことでありうる。迷惑だと言う人が一人でもいたとしたら、それは迷惑をかける行為である。そのように言えば言える。

A 大抵の人はこんな難癖をつけられたら困ってしまう。単に何かについて誰かが不快であるというより（ずっと）狭い範囲に「迷惑」を限定するだろう。私もそうすべきだと考える。しかし問題はそれをどのように言うかである。これを言うことなしに、具体的に何を認め、何を認めないのかは決まらない。しかし先の①「危害を与えない限りにおいて」という言葉の中にはそれに関わる言明はない。

まず危害の直接性・間接性という基準を思いつく。しかし、もちろん身体への侵②襲③という意味での直接的な危害だけが問題になっているのではない。言うまでもなく、精神的な苦痛の方がより大きいことがいくらかでもある。だから、少なくともこの意味での直接性・間接性が基準になるのではない。

B 直接にある人への危害を意図しないものであるなら、それは迷惑ではないとしようという考え方があろう。しかし意図していないければよいのか。ある人にとって迷惑となることが予見される場合にそれを行なった場合にはどうか。そうした時にも過失責任が問われたり、結果責任が問われたりすることがある。だから、危害、不快感を④与⑤与えることが予測されるのであれば、それは許容されないということにもなりうる。

他方で、その人がしたいことをしようとする時にどうしても迷惑をかけることがある。例えばその人は足が動かないのだが、しかしどこかに行きたい。自分の足で行けないから、他人の力を借りることになる。これはその他人にとって迷惑でありうる。（もちろんそれを迷惑と感じない人もいるだろう。しかし、迷惑だと思う人もいて当然である。）

このように直接に迷惑をかける場合だけではない。例えば、自分が働いた結果を自分でとる行ないは他の者に「迷惑」をかけていない行為であるとしよう。この時、そうした行為だけが行なわれている空間にあつて、働けない（ので自分で自分のものを得られない）者は、誰もがそれ

を積極的に希望しているのではないが、死ぬ（ことがある）だろう。もちろん自発的に何かを与えようとする者はいるはずであり、そのことを自己決定主義者達は認めるだろう。しかしそれはあくまでも自発的なこと、すなわち、X ことである。もし、それでよいとは考えないのであれば、別のものがそこにあるということである。また例えば、良心的兵役拒否という行いがある。兵役を拒否する人は、戦争に加担しないことによって、敵に殺されるかもしれない国民に迷惑をかけていると言えるかもしれない。とすると、どんな自己決定についてどこまで寛容であるべきかを言わなくてはならない。

自己決定（権）という言葉のもとに主張されてきたことの一つは、実は「迷惑をかける権利」だったのだとも言える。とすると、このように主張する人にとっては、迷惑をかけようがかけまいが、ある人には何かの権利があり、その中には何かについて決定する権利も入っているのだということである。こうしたことについての考え方は、ひとまず、人によって様々であるだろう。C、どういう立場に立つのかとは別に言えるのは、人によって様々であるこの線の引き方について、「自己決定の原理」自体は何も言わないということ、判断する基準を示すことがないということである。

自分が生きていることがまわりに迷惑をかけると考えざるを得ない社会状況のもとでの「死の自己決定」は、本当に自分の本心から決めるというより周囲から追い込まれて、「2 仕方なくさせられる死の自己決定」ではないだろうか。

一貫して安楽死と呼ばれるものを巡る動き、言葉を追い、問題にしてきた人の文章の一部である。私は、こうした指摘が本質的なところをついたものだと考えている。これで皆が納得してくれば、つけ加えて言いたいことはあまりない。ただ、納得しないとって、次のように食いつく人がいるだろう。

これは、他者からの影響による決定は「本当の自己決定」ではないという主張だろうか。しかし他から影響を受けない決定、そういう意味で本当の自己決定などというものがあるのか——特に社会学者はそのように考える。考えてみると、そうそうあるようにには思えない。そして、影響と言う時、ひとまずはそれは外的なものとされるのだが、それを信じている（批判者の側から見れば信じこまされている）という場合もあるだろう。この時には、その人の心情、信念自体を問題にすることになる。これは余計な詮索ではないか、誰にどう言われようが私はそれで納得してやっているのだ。こう言われるかもしれない。

だから、3「本当の自己決定」を持ち出す方が不利のように思われる。そんなことを言っていたら、なんだって問題だということになるでは

ないか。だから、積極的に選んだことであれしぶしぶ選んだことであれ、結果としてその人がそれを選んで行なったのであれば、それらをみな自己決定に基づく行為としてそのまま認めればよい。このように言う人がいるかもしれない。

たしかにこれが一番簡単な道ではある。決定に際しての条件を定めておかないと、決定の中身は具体的に定まらない。それに対して、条件を特定しておけば、なされる決定、行為は一つに決まる。これは明らかである。だが、ここまでのところで、条件を問題にすべきでないという根拠は、何も問題にせず現実の条件をそのまま認めればともかく具体的な決定のありようが今まで通りに決まるので（なんでもとにかく決まってしまう方が何よりもよいと思う人にとって）面倒がないということ以外にはない。

そして基本的な問題は、決定の条件を問題にせず、その時点での決定を自己決定と言い、それを尊重すべきだとするならば、それは一切の決定がそのまま認められるべきであるという主張であり、現実存在する決定の結果の一切を肯定していることにほかならない。現在の状態だけではない。⁽⁴⁾あらゆる状態は区別をつけられることがない。決定したからには決定した方がその人にとってよかったのだろう、だから全ての決定はよい決定だ、だからそれでよいという理屈がここにあるとすれば、これはどんな初期の配分をしても、それ以降なされる交換の結果は常に^(注)パレート最適になるというのと似ている。D このことを肯定するのではないなら、その人は、現実の自己決定のすべてを許容しているのではないということであり、対立があるとすれば、それは問題とすべきその範囲と程度についてなのである。

例えば「性の商品化」についてよく言われていることとして、かつては経済的理由によるものだった（からそれは問題であった）が、今はそうではなくなった（だから問題ではない、「立派な自己決定」である）というものがある。事態の②推移そのものとしてはそうであるかもしれない、実際にはそれほどではないかもしれない。見る場所によっても違ってくるはずだ（本業として行っている人達の場合とアルバイトである場合、等）。確かなことを知らないが、ここで問題としたのは事実認識の当否ではないから、それは置く。確認すべきは、貧困による売春（あるいはむしろ貧困を背景とする買春）は問題であると言ったり、経済的な理由による臓器の提供（むしろ臓器の購入）は問題であると言ったりしているということである。とすると、これらもまた自己決定ではあるから、一切の自己決定にはどんな場合にも何の問題もないと言い張っているのではない。しかも、貧困によって別の仕事をするということについては問題だとされない。とすると、自己決定されるものの中のある部分については、

Y

と自己決定主義者自身が考えているということである。明らかな強制——実はこれ自体、そう簡単に確定できはしないはずだ——以外の現実の全てをそのまま認めるという立場をとるのであれば、誰もが決定の「内容」に立ち入っているのであり、立ち入らざるをえないでいる。

以上で、私は、自己決定を主張する人とまったく別の立場を述べたのではなく、それを主張する人の言うことに即して述べた。そして、以上

の指摘自体は実に単純なものである。だが、このごく単純なことについてあまり考えることがなされない。自己決定の主張が妥当な主張でないと言っているのではない。「迷惑をかけないなら何してもよい」と、ただそれだけを言うのなら、それは

Z

ということである。

(立岩真也『弱くある自由へ 自己決定・介護・生死の技術』青土社)

(注) パレート最適——誰かの効用を犠牲にしなければ、他の誰かの効用を高めることができない状態。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ意味をもつものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

 ～

3

。

(ア) 侵襲

1

① 襲名

② 世襲

③ 襲来

④ 因襲

(イ) 与える

2

① 与奪

② 関与

③ 与党

④ 参与

(ウ) 推移

3

① 推奨

② 邪推

③ 推進

④ 類推

問 2 空欄 A ～ D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A ・

4

、B ・

5

、C ・

6

、D ・

7

。

問5 傍線部(2)「仕方なくさせられる」と同義となる言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 不可解な
- ② 不穏当な
- ③ 不合理な
- ④ 不本意な
- ⑤ 不謹慎な

問6 傍線部(3)「『本当の自己決定』を持ち出す方が不利のように思われる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 「本当の自己決定」に基づいてなされる行為であっても、純粹にそれだけで完結したものではありえず、その行為が思いもよらぬところに波及し、迷惑をかけていることもありうるから。
- ② 自分の本心に基づく「本当の自己決定」がなされたと思われるような場合であっても、決定を下した本人の心情や信念は、外的な存在から影響を受けたものである可能性を否定できないから。
- ③ 「本当の自己決定」とは、外からの影響を一切受けない純粹な良心に基づいてなされるものであるから、その存在を認めると、かえって自己決定主義者の主張を脅かすことになるから。
- ④ 生きている限りまわりとかかわらないでいることはありえないので、他人に迷惑をかけないように「本当の自己決定」を徹底しようとする、かえって生きにくいということになってしまうから。
- ⑤ 実際にはありえない「本当の自己決定」などというものによって、自分の行為を正当化しようすると、最終的に「死の自己決定」についても誤った判断をすることになりかねないから。

問 7 傍線部(4)「あらゆる状態は区別をつけられない」とあるが、なぜそのようなことになるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 誰にも迷惑をかけていないのであれば、その結果がどのようなものであるかは問題にならないから。
- ② 今発生していることを条件にして、将来どのような結果が生じるかなど誰にもわからないから。
- ③ 現実の結果となって現れたことだけを問題にし、それがよって立つ初期の条件を度外視しているから。
- ④ よって立つ条件が異なるとしても、結果として現れる現象が同じになる可能性を排除できないから。
- ⑤ すべては自己決定の結果であり、そこに生じる差異に配慮をすれば、かえって社会正義に反するから。

問 8 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 少なくともある種の自己決定をそのまま認められないような何かがある
- ② 「性の商品化」とはまったく関係のない問題が存在することになる
- ③ 強制などまったくない「本当の自己決定」によってなされたものである
- ④ 貧困状態にあってもなお損なわれることのない主体性が存在している
- ⑤ 著しい迷惑を生じているためそのままでは認めることができない

問 9 空欄 Z を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 「死の自己決定」をも認める
- ② 結論を先取りしてしまっている
- ③ 自己決定主義に陥ってしまう
- ④ 何も言っていないに等しい

⑤ もはや反論にもなっていない

問 10 本文における自己決定主義者の考えとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。次に解答番号は 15。

- ① 他人に対する直接の侵襲がないかぎり、どのような決定をし、行動をするのも自由である。
- ② 「迷惑をかけない限り、何もしてもよい」という主張は、それ自体、論理矛盾をきたしている。
- ③ 結果として生じたことに対して、遡及的に初期的な条件を問うようなことはしてはならない。
- ④ 臓器移植と同様に、自らの性を商品として扱うことも、おしなべて認められるべきである。
- ⑤ あとから結果的に本人が選択したと認められることであれば、それは自己決定に基づいている。

II 次の文章を読んで、後の問1～問9に答えなさい。

日本ではコメはとても貴重なものでした。コメはイモと違って数年間の保存がきくので、不作や、お城に籠もるような戦に対応できます。そのため、明治以前の時代では、コメで年貢を納めるのが原則でした。結果として、農民たちはコメをつくることに集中しました。

よく知られているように、コメは日本の在来種ではありません。他所よそから持ってきたものです。サツマイモについては琉球国りゅうきゅうこくの『球陽』という歴史書に記されていて、中国から琉球を経て鹿児島に入ってきた経緯が明確です。一六〇五年に中国から琉球国の総官の野国のぐにがサツマイモを「盆に植えて」持ち帰ったという、詳しい記述が残っています。けれども、コメは原産地や到達経路についても②諸説があり、まだ全容が解明されてはいません。

ただ、①ここで述べたいポイントは、コメは日本の在来種ではないので、日本の自然の中では十分な生育ができないことです。コメは乾季・雨季がハッキリしている地域のほうがよい生育をするようです。そのため、乾季・雨季が明瞭でない日本では、「人工的に」乾期と雨季をつくる必要がありました。とりわけたいへんなのは、雨期の形成です。

日本でも一部の田んぼには十分すぎるほどの水が来るところ（湿地）がありますが、多くの地域では水不足が常に農民を悩ませました。

雨乞いという行事があることは知られているでしょう。雨乞いはかつては国家行事で、天皇が吉野山みくまりの水分神社や伊勢神宮などに雨乞いの使者を派遣していました。このように、遠い昔は雨不足は国家的な問題だったのですが、基本的には雨乞いは村の行事でありつづけました。山の神や水の神という神頼みも行いつつ、③それと並行して技術的な工夫をしてきました。

分かりやすいと、一枚の田んぼは、スープレ皿のようになっていて、水が漏れない工夫がなされているのです。上から見ると田んぼは土ばかりですが、土だけではせつかく注入した水は下に浸透していつて、田んぼの表面から水がなくなります。田植えの後に、田んぼに水が満々と湛たえられていることを不思議に感じませんか。じつは田の底は粘土でかためられていて、水が浸透しなくなっているのです。

けれども、底だけでは水は横から漏れますね。それを防ぐために畔塗あぜぬりをします。

④秋田で農業をしている方の文章をここで紹介しておきましょう。畔塗の気持ちが生きて表れています。

畔塗りは、「荒がき」といわれた一番代しうだいと仕上げをする二番代の間に行われた。四本鍬くわで、よくこねられた餡あん〔水あめ〕のような土をすくいとって畔に打ちつける人、それを平鍬で。たんぺたんとして押えてからすうとなでつけていく人、それぞれ呼吸を合わせながら一枚、一枚

の田圃^{たんぼ}を額縁にはめこむように縁どつていくのであった。

見わたすかぎりの水田耕野が、黒々と光る無数の畔に仕切られ、はじめて田圃の形をととのえてゆくさまはまさに壮観であった。それは、水もれを防ぐという機能的な面もさることながら、「ここに我の田があり」とする農民の所有の証しであり誇示でもあったのである。

(3) わたしなど素人はどうしても機能面だけを考えてしまいますが、それを実際に行っている人たちには「ここに我が田あり」という誇りが同時にあることを教えてくださいました。ともあれ、このようにして水漏れを防いでいるのです。

雨期というには恥ずかしい程度ですが、日本には梅雨があります。おそらく田んぼの面積が少なければ、この梅雨で対応できたかもしれませんが、人口の増大に合わせて、できるだけ多くの田んぼをつくろうとしてきたわが国では、当然水が足りなくなるわけです。技術面ではそれがいわゆるスーパ皿をつくる工夫でした。

田植えの時期になると、見渡す限り田んぼが広がる平野全体が、いわば人工の雨期になります。すなわち、水が満々とたたえられて、人間がつくった湿原になるのです。夏の終わり頃になると田は水を落とします。乾期になるわけです。

また、田んぼまで水を導入するために、河川の堰^{せき}や込み入った用水路を作ったりもして、その保全のために多くの農民が(4)汗を流してきました。このように田だけを考えても、人間は自然に手を加えてきました。もちろん、畑は開墾というかたちで野に直接人間が手を加えたものです。

このような自然をどう呼べばよいのでしょうか。堅い言い方をすると二次林と同様な言い方で「二次自然」ともいえますが、「人間参加型自然」とでもいっておきましょうか。こうした田畑、用水路や川、それとつぎに述べる山も同様ですが、現代人は(5)これらにある種の自然とみなしているのです、とりあえずこのような表現を使ってみたのです。

田に十分な水を供給するためには、山を整備する必要があります。農民はつねに山に注意を払いました。この山からの水を差配する神さまは、山であるので山の神であることもあるし、水なので水の神であることもあります。つまり混在しています。奈良の大和平野を見下ろす吉野山には先ほどふれた「水分神社」がありますが、これは水の神です。

農民たちはまた、神さまにお願いをするだけではなくて、山肌を鋤でコツコツ打って山の水の流れを整備しました。さらに、木の伐採や植える木の種類にも注意を払いました。このような作業を指して、田や飲用の水不足を避けるために、里人たちが山のなかで「水を創造」している

のだと X に表現しても過言ではないでしょう。

また、山はさまざまな幸を里人に与えました。先に述べた食料だけではなくて、他に肥料、燃料、建築材をも与えてくれたのです。

江戸時代に記された『耕稼春秋』（宝永四年）という書物があります。著者の土屋又三郎はいわゆる篤農と呼ばれる人です。

土屋は「田畑に続いて特に山林を重視すべきである」といって、木を植えることによって、「人々の働く仕事が増加することになる。したがって、老人、身体の弱い者、身体障^{しょうがい}碍者、またよるべない孤独の者までも、それぞれに能力に応じて器物の製造などの手伝いに従事することができ、無駄に（原文は「空しく」）衣食を費やすことなく、しかも飢餓の難も逃れることができるのである」と指摘しています。

なかなかの見識であると思います。

山林に対するこうした考え方は、江戸時代にかぎらず、基本的には現在までつづいています。「基本的には」と言ったのは、安い外材の輸入など、いろいろな問題が山林にも起こり、必ずしも土屋の言ったとおりにはなっていない側面があるからです。しかし、その精神はキッチンと受け継がれています。

山はこれほどの豊富なものを人間に与えてくれるのだから、里人たちが山の保全に多くの労力をかけたであろうことは容易に想像できるでしょう。日本の村の各地で使われている言い方ですが、人びとが山の手入れをしなくなると、「山が荒れた」といわれます。

これは「山は人間の手が入らない純粹の自然が望ましい」という都会の人たちの主張しがちな ⑤ いわゆるエコロジー論とは大きく異なります。自然保護に熱心な人たちは、自然に人の手が入らなければ入らないほどよいのだと考えがちだからです。

しかし、この種の自然保護を目的としたエコロジー論は、農業をする人たちとは反対の考え方です。もともと自然保護にはさまざまな考え方や政策があります。ただ、環境社会学者でもあるわたしは「生活環境主義」という用語を用いながら、農民のこのような生活を基盤とした行為こそが自然環境を守るのだと主張しています。

Y

のです。

（鳥越皓之『村の社会学―日本の伝統的な人づきあいに学ぶ』筑摩書房）

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 16 18。

(ア) 諸説 16

- ① 網羅的な説
- ② わかりにくい説
- ③ 古くからの説
- ④ 未確定の説
- ⑤ さまざまな説

(イ) それと並行して 17

- ① それに先んじて
- ② それと引き換えに
- ③ それと同時に
- ④ それを見越して
- ⑤ それに続いて

(ウ) 汗を流して 18

- ① 労苦をいとわず働いて
- ② 力の限りを尽くして
- ③ あらゆる手段を講じて
- ④ 長い時間をかけて
- ⑤ 我慢強く耐え抜いて

問 2 傍線部(1)「ここで述べたいポイント」とあるが、そのポイントとは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 人工的に乾期と雨期をつくることでようやく、日本でもなんとかコメが育つようになったという点。
- ② 日本の在来種ではないコメは、乾季と雨季がそれほどハッキリしていない日本ではよく育たないという点。
- ③ サツマイモとは異なり、コメが日本に入って来た経緯に関しては未詳の部分が多く残っているという点。
- ④ コメはもともと日本にあった種ではないので、どのようにしても日本では栽培することができないという点。
- ⑤ 日本では多くの地域で水不足が深刻であり、そのためにコメが十分に生育するのは困難であるという点。

問 3 傍線部(2)「秋田で農業をしている方の文章」とあるが、以下に示すのは、その文章に関して生徒が話し合っている様子である。本文を踏まえた発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 生徒A——この文章は、田んぼをスーンプ皿のようにするために必要な畔塗の工程を、私たち読者にわかりやすく伝えるために筆者が紹介したものだね。たしかに、畔塗がどのようにして行われるのかが順を追って説明されていて、私にもわかりやすい。
- ② 生徒B——畔塗にもいろいろな方法があることが、この文章を読むとわかるよね。それにしても、日本には梅雨というしつかりとした雨季があるのに、それだけでは水が足りないなんて、コメを栽培する農家の人たちの苦労は並大抵のものではないと思う。
- ③ 生徒C——私はむしろ、農民としての誇りのようなものを、この文章を読んで感じたな。自分たちがつくりあげた田んぼが見わたすかぎり広がる光景はさぞかし素晴らしかっただろうし、それこそ「ここに我が田あり」という気分にもなったと思うよ。
- ④ 生徒D——そうだね。「ここに我が田あり」という言葉には、筆者も言うように自分たちの作っているコメに対する強い愛着が表れているよね。農業には技術も必要だけど、それ以上に人の気持ちが大それたことをこの文章は教えてくれている。
- ⑤ 生徒E——筆者は、まさにそのような農民に特有の精神性を示すために、この文章を引用したのだと思う。日本のコメづくりを支えているのは、機能や技術などではなく、農業に携わる人たちの誇りであるということがよくわかり、勉強になったよ。

問 4 傍線部(3)「わたしなど素人はどうしても機能面だけを考えてしまいます」とあるが、その機能面とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 田んぼが満々と水を湛えられるようにする、というもの。
- ② 自分が所有する田んぼの範囲を確定する、というもの。
- ③ 田んぼの形を額縁のようにととのえる、というもの。
- ④ 田んぼの底から水が漏れ出るのを防ぐ、というもの。
- ⑤ 人口の増加に合わせイネの増産を図る、というもの。

問 5 傍線部(4)「これらはある種の自然とみなしている」を言い換えた表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 自然の中でも人間が直接かかわったものは特別視するようにしている
- ② 二次林のような「二次自然」と「人間参加型自然」とを区別しないでいる
- ③ 人工的に作り出した田畑や用水路を山のような自然と同一視している
- ④ 田畑のような人間の手が加えられたものも自然の一部であると考えている
- ⑤ 人間がつくった田んぼや畑を「人間参加型自然」と呼びならわしている

問 6 空欄 X を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 包括的
- ② 比喩的
- ③ 擬人的

- ④ 発展的
- ⑤ 短絡的

問 7 傍線部(5)「いわゆるエコロジー論とは大きく異なります」とあるが、なぜそのようにいえるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 江戸時代から広く日本で行われてきた山の保全は、純粹な自然の保護を目的としたものではなく、山の神を信仰することを通じ、結果的に純粹な自然を守ることにつながるというものだから。
- ② 現在の自然は人間が積極的に手入れをすることによって守られてきたのであり、その意味では、今日の自然保護で想定されるような人の手が入っていない純粹な自然など、すでに存在しないから。
- ③ 日本の村で行われてきた山林の保護は、田畑に十分な水を供給するという明確な目的のもとで選択的に行われてきたのであり、自然ならば何でも守るというような自然保護のあり方とは相いれないから。
- ④ 手入れをすることにより「山が荒れた」状態にならないようにしようとする試みは、自然そのものから得られる恵みを重視するものであつて、必ずしも経済的な利益には結びつかないから。
- ⑤ 里人たちが行ってきた山の整備や保全は、人の手が加えられない自然を守ろうとするものではなく、むしろ手入れをすることによって、人々に豊かな恩恵をもたらす自然を守ろうとするものだから。

問 8 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 人が山に手を加えないと山が荒れるという農民の考え方に同調している
- ② 生活の場である「二次自然」を自然とみなすことに異を唱えている
- ③ 自然とは人が入らない原生のままのものだという考えを支持している
- ④ 田畑を手つかずの自然と同じように大切にすることに疑問を呈している

⑤ 山が荒れることをあえて行う都会の人々の身勝手さを批判している

問 9 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

26

30。

ア これまで里人や農民が行ってきたような、現実の生活にもとづいた自然保護のあり方こそが重視されるべきである。

イ 「生活環境主義」は、いわゆるエコロジー論とは異なるが、江戸時代の『耕稼春秋』にある思想とは通底する部分がある。

ウ 「山が荒れた」といわれるような事態が発生しても、生活の場にある「人間参加型自然」が損なわれることはない。

エ 在来種ではないコメまでが大切に扱われるようになったのは、日本に古くからエコロジー論的な発想があったからである。

オ 自然保護を究極の目的とする現在のエコロジー論は、田畑のようなものである種の自然とみなし、保護しようとする。

26

27

28

29

30

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

たとえば、① わたしたちはなぜ、逃げることを心の深いところで忌避するのか、と問いかけてみます。それが身を守るという生存戦略にとつては、きわめて不自然かつ非合理的な選択であることは否定できません。命をめぐる危険水域にまで追いつめられ、それをあきらかに② Aしてしながら、人はなぜ、ときに、なおそこに留まるという選択をするのか。隷従と自己犠牲のはざまに、いつたいなにが起こっているのか。その選択の背後には、なにか不可思議な、たとえば人の心にまつわるメカニズムが隠されているのかもしれませんが。――①――

およそ一万年前に、ユーラシアのいたるところで定住革命が始まった、といわれています。人類は遊動を基調とする生活様式から、ある土地に家を建てムラの③ おきてにしがたって暮らす、定住的な生活様式へと移行していったのです。念のために、ここで遊動とは移動・漂泊・彷徨・流離といった、それぞれに情緒的な背景を背負った言葉の群れからひとたび離れて、非定住的な生活様式を④ Bする言葉として選んでいます。この日本列島においても、ほぼ同じ時期に定住革命が始まり、人々の暮らしや生業の風景は大きな変容を遂げていったようです。思えば、そのとき、「建てる・住まう・考える」という⑤ 注1ハイデッガー的な主題が人々の精神の前景にあらわれ、やがて世界を覆い尽くしていったのです。

――②――

② ① むろん、二十一世紀のはじめ、今日にいたるまで、この地球のうえから遊動的な生活スタイルが根絶やしにされたことはありません。いまもそれは、⑥ ⑦ かぎりなくローカルなたちであれ残存しています。

いわば、定住を無意識の前提として、それを心の主旋律とする世界観が人々を呪縛しているような、そうした世界の片隅にわたしたちは生かされているのです。ここでは、逃げる・去る・離れる、といった心的な防衛機制がマイナスの色合いに染めあげられ、断罪され、心の病いの原因と見なされることでしょう。しかし、定住革命以前の遊動をつねとしていた人類は、⑧ Xをくりかえしながら、やわらかく社会を維持してゆくために、むしろ逃げる・去る・離れるといった行動原理を、プラスの生存戦略として受け入れていたらしいのです。

ここでは、人類学者の西田正規さんの『人類史のなかの定住革命』をたいせつな導きの糸としています。西田さんが⑨ Cされた定住革命論はいまも衝撃に満ちています。一万年前の定住革命によって、人類の生存環境は「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へと転換していきましたが、そのとき、人の心はいかなる変容を強いられたのか。それはまさに、現代においてこそ⑩ 切実に問われるべきテーマであるのかもしれない、と感じています。

それにしても、定住革命以後の一万年の時間のなかで、人の心はいかなる変容を遂げてきたのか、といった問いは⑪ ⑫ 未知の領域に属しています。わたしたちが「日本人の心」といったことを問題にすると、それはほぼ例外なしに、稲作農耕が広がった弥生以降の二千数百年の時間

のなかで語られてきました。そもそも、われわれは縄文人の心を解き明かす考古学が可能だとは、おそらく信じてはいません。だから、いくらが唐突ですが、この国では縄文の図像学的な研究が、いたって(注2) マージナルな場所に追いやられてきたのです。それは遺された形象や紋様をもとにして、人の心や精神世界を読み解こうとする研究です。心の考古学そのものが不在なのです。【③】弥生以降の農耕中心の社会であれば、現代にまでなんとか地続きであり、われわれはアルケオロジーに拠らずに心の理解が可能だと感じています。

たとえば、(4) 唐木順三の『日本人の心の歴史』といった著書の退屈さは、まさにそれが、弥生以後を自明の前提として語られているからです。そこでは定住と農耕を無意識の尺度として、人の心や情緒が測られ、描きだされます。【④】その「はしがき」の一節には、「日本人の季節への鋭敏な感受性」が指摘されています。日本文化論が定型的に物語りしてきたものですが、唐木はそこに、「合理的分析的に解明してしまへば、はかなく消えてしまふやうな、そこはかとなない気分、気持、こころ、感情の中に、日本人の季節美感、日本語でしか示しえない美しく微かな美感がある」といった言葉を、やはり定型的にかぶせています。

それはしかし、「もののあわれ」に抱かれた暗黙の共同体の内側でのみ、その存在が認められる情緒ではない、とあえてDしておきます。そうした季節感と結びついた美意識の(5) 大方は、わたしたちの暮らしのなかから失われました。さすがに、現代では「もののあわれ」を自明の起点にして、日本人の心の歴史といったものを語ることは、途方もない時代錯誤と感じられることでしょう。ここではただ、それが定住と農耕を無意識の尺度として測量され定位されていることを、言い捨てに指摘しておきます。

(5) だから、心の考古学が必要なのです。いまからおよそ一万年前に、人類は遊動から定住へと大きな生存の戦略を変えました。【⑤】そのとき、人の心はいかなる変容を遂げたのか、あるいは、遂げなかったのか。遂げたのだとしたら、どういう変容を強いられたのか。テーマは(6) あらかじめ、そこに絞りこまれています。もしかすると、その一万年の定住の時代が、わたしたちの足元ですこしずつ崩れつつあるのかもしれない、という予感があります。一万年続いた定住の時代の(6) 黄昏のなかで、そのはじまりに起こったはずの変容の意味を問いかけることは、わたしたち自身の心のありようを、もっとも深いところから照らしだす仕事にもなることでしょう。

(赤坂憲雄『災間に生かされて』亜紀書房)

(注1) ハイデッガー——ドイツの哲学者(一八八九—一九七六)。

(注2) マージナル——周辺にあるさま、の意。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

31

 ～

33

。

(ア) 切実に

31

- ① 誰にでもわかるように
- ② できるだけ速やかに
- ③ 実効性のあるかたちで
- ④ 目先の利益にとらわれず
- ⑤ 差し迫ったものとして

(イ) 大方

32

- ① 中心的な部分
- ② 根本にある部分
- ③ 表立った部分
- ④ ほとんどの部分
- ⑤ よく知られた部分

(ウ) あらかじめ

33

- ① 前もって
- ② おのずから
- ③ 例外なく
- ④ さしあたって
- ⑤ 予定通り

問 2 空欄 A 〓 D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A・34、B・35、C・36、D・37。

- ① 提唱 ② 断定 ③ 包括 ④ 駆逐 ⑤ 認識

問 3 傍線部(1)「わたしたちはなぜ、逃げることを心の深いところで忌避するのか」とあるが、この点について筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 定住革命が起こってからは、共同体の規律に従って合理的な生活を営むことが当然とされるようになり、規律から逸脱した行動をとることは卑しまれるようになったからである。
- ② 定住革命が起こる以前から、人類には自己犠牲をいとわず、生命に対する危険が迫っていてもなおそこに留まるという非合理的な選択をする心性がそなわっていたからである。
- ③ 定住革命が起きたことをきっかけに、遊動から定住へと人類の生存戦略は大きく転換を遂げ、非定住的な生活スタイルは共同体の安定を脅かすと考えられるようになったからである。
- ④ 定住革命が起こってからのというもの、人類の生存環境は根本的に変化し、かつて行われていた遊動的な行動は、共同体の規則によって禁止されるようになったからである。
- ⑤ 定住革命が起こって以降、ある土地に留まって生活することが当たり前と考えられるようになり、非定住的な行動原理や生活様式は消極的にとらえられるようになったからである。

問 4 傍線部(2)「かぎりなくローカルなたちであれ残存しています」の言い換えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 39。

- ① いつまでもローカルなたちのままで残っている

- ② 最もローカルなかたちのものですら残っている
- ③ はなはだしくローカルなかたちのものまで残っている
- ④ 想像以上にローカルなかたちとなって残っている
- ⑤ この上なくローカルなかたちであるにせよ残っている

問 5 空欄 X を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 40。

- ① 離合集散
- ② 東奔西走
- ③ 朝令暮改
- ④ 右往左往
- ⑤ 一進一退

問 6 傍線部 (3) 「未知」の対義語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 41。

- ① 承知
- ② 旧知
- ③ 既知
- ④ 予知
- ⑤ 熟知

問 7 傍線部 (4) 「唐木順三の『日本人の心の歴史』といった著書の退屈さ」とあるが、その退屈さは何によるものだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 42。

- ① 日本語でしか表現しえない美感や季節感覚について論じているだけで、幅広い理解が得られるものになっていないから。
- ② マージナルな存在への配慮がまったくなくなれておらず、日本人の心の歴史だけを取り上げるといふ独善に陥っているから。
- ③ 弥生以後の日本文化論が定型的に語られているにすぎず、日本人に特有の美意識や季節感覚の機微に触れていないから。
- ④ 稲作農耕を中心とした弥生以降の生活スタイルを所与の条件として、日本人の感覚や感受性が語られているにとどまるから。
- ⑤ 定住が当たり前となった弥生以後の日本を対象としており、遊動的な生活にある「もののあわれ」をとらえていないから。

問 8 傍線部(5)「だから、心の考古学が必要なのです」とあるが、筆者の考える心の考古学とはどのようなものか。その説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 43。

- ① 一万年前に起こった定住革命が人類の心を与えた影響を、マージナルな形象や紋様を手掛かりとして探っていく学問。
- ② 縄文人の心がどのようなものであったかを解き明かすことにより、わたしたち自身の心のありようを知ろうとする学問。
- ③ 人類が遊動から定住へと生存戦略を転換したとき、その心にはどのようなことが起こっていたのかを解き明かす学問。
- ④ すでに時代錯誤となった「もののあわれ」に代わる観点から、古くから続く日本人の心の特性について語る学問。
- ⑤ 定住革命が起こる前の人類がいかなる心を持ち、どのような生活をしていたのかを、類型的に描き出していく学問。

問 9 傍線部(6)「黄昏」という表現は、何をたとえたものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 44。

- ① 秩序が失われた不安定な状況
- ② これまでの延長線上にある時点
- ③ 終わりに近づいていく時期
- ④ 新たなものが興るまでの過渡期
- ⑤ どうなるかわからない状態

問 10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。解答番号は 45。

【しかし、意外なほどに、それがそれとして問われる場面はすくない気がするのです。】

問 11 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は 46。

50。

ア わたしたちは今、定住が時代錯誤のものとなり、旧来の共同体的な生活スタイルがすこしずつ崩れていくを感じている。そのような状況の中で、あらためて定住の意義を確認し、新たな生活スタイルを確立することが急務となっている。 46

イ 一万年前の定住革命によって、「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へと人類の生存環境は変化したとされる。そのとき、人類の心にどのようなことが起きたのかを問うことは、現代において非常に大きな意味をもつ。 47

ウ かつて日本列島においても、ユーラシアとほぼ同時期に定住革命が起こり、わたしたちもまたその延長線上にある時代に生きている。それは、どうにかして逃げることを忌避しようとする心のメカニズムとして表れているといえる。 48

エ 「日本人の心」なるものが問題になるときは、弥生以降の時代を前提に語られるのが一般的であり、そこでは縄文人の心は捨象される。しかし、そのような形で語られる日本文化論は、共同体の内部でのみ通用するものであり、つまらない。 49

オ 弥生以降の社会に関するアルケオロジ―は学問として認められているが、それよりも前の時代に関する研究は、マージナルな位置に置かれてきた。今後はそのような状況を改め、心の考古学という学問領域を確立する必要がある。 50